

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*



全体の目次

前書き	p. 1
序 章 現代―柏の葉地区の歩み―	p. 2
第1章 原始古代	p. 12
I 柏の遺跡	p. 13
第2章 中世	p. 33
I 古代から戦国時代の柏市域	p. 35
II 柏市の製鉄遺跡	p. 50
第3章 近世	p. 57
I 江戸時代の柏と小金牧	p. 59
II 柏の水運―手賀沼と利根川の開拓と物流―	p. 74
第4章 近代	p. 85
I 小金牧の開墾―十余二地区を中心として―	p. 86
第5章 柏市の農業	p. 93
I 昭和から平成までの変遷	p. 94
II 柏市の農業 トピックス	p. 105
第6章 (小金牧) 十余二開墾物語	p. 116
I 小金牧の開墾―入植時の苦労話―	p. 117
II 十余二の土壌と栽培作物に関する話	p. 118
III サツマイモ・農業に関する話	p. 119
IV 柏飛行場の開設に関する話	p. 120
V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話	p. 120
柏市とその周辺の歴史年表	p. 122
制作メンバー一覧	p. 126

はじめに

この書籍の制作は、2017 年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム A コース『柏の歴史、文化、産業』の開講がきっかけになっています。柏市に長年居住している人でも、柏地域の歴史や文化、そして経済についてよく知っているわけではありません。そこで、柏市のことを勉強するというプログラムが企画されました。

このプログラムを通して柏市の歴史に興味を持った市民が集まり、大学と一緒に、地域の歴史について勉強したり、調べたりして、この書籍を完成させました。2018 年 1 月 20 日に第 1 回のミーティングが開催され、2020 年 2 月 22 日まで 20 回以上のミーティングを重ねて作りあげました。

地球上のどこの地域にも、地域ごとに先人たちの歴史があります。その歴史が幾重にも積み重なり、私たちが生活している現代に繋がっています。この書籍は千葉大学柏の葉キャンパスが位置する十余二地域を中心にして、まとめてあります。この書籍を手にとった方がこの地域の歴史を知ること、この地域への愛着を少しでも持ってもらえたら幸いです。

なお、2017 年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラムは柏市教育委員会文化課と経済産業部に協力していただきました。そして、この書籍の作成には、プロジェクトの立ち上げ当初から柏市教育委員会文化課に多大なるご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2020 年 9 月 1 日

千葉大学環境健康フィールド科学センター
野田勝二

第2章 中世

目次

I	古代から戦国時代の柏市域	
1.	概要	p. 35
2.	大和の力が柏に（弥生、古墳時代）	p. 35
(1)	弥生時代	p. 35
(2)	古墳時代	p. 36
(3)	「総」の国の様子	p. 36
3.	古代国家の形成・東国武士団のおこりと柏	p. 37
(1)	都と柏を結ぶもの（奈良時代）	p. 37
①	奈良時代の交通路	
②	都に納めたもの	
(2)	将門旋風ふきあれる（平安時代）	p. 39
①	平将門の登場	
②	下総の荘園のおこり	
4.	武将の争乱のころの柏	p. 42
(1)	頼朝挙兵を手助けした千葉氏（鎌倉時代）	p. 42
①	源頼朝と柏	
②	千葉氏の6人の兄弟が下総一帯に勢力を伸ばした	
③	阿弥陀如来坐像をめぐる謎	
(2)	境根原の決戦（室町時代）	p. 44
①	南北朝の争いの時、千葉氏はどのように行動したか	
②	相馬御厨をめぐる争い	
③	境根原の合戦とは	
④	合戦・武士にまつわる地名	
(3)	上杉氏と北条氏の戦い（戦国時代）	p. 46
①	戦乱に巻き込まれる東葛地方	
②	天下の統一と柏周辺	

③ いろいろな職業

④ 地域に残る城跡

Ⅱ 柏市の製鉄遺跡

- | | |
|-------------|-------|
| 1. 概要 | p. 50 |
| 2. 世界の鉄の歴史 | p. 50 |
| 3. 日本の製鉄史 | p. 50 |
| 4. 柏市の製鉄遺跡 | p. 52 |
| 5. たたら製鉄の概要 | p. 54 |

参考文献

I 古代から戦国時代の柏市域

1. 概要

弥生時代、古墳時代を経て、大和地方に古代国家が誕生しました。律令制度のもとに、全国に国府（長官「国司」の役所）、国分寺、国分尼寺がおかれ、これらと都を結ぶ交通網が整えられ古代国家が形成されていきました。

都からは皇族や貴族が各地方に派遣され、地方の行政、開発が進められていきましたが、地方の開発が進むにつれて、力をつけた地方長官などが都に帰らず土着して地方豪族となり荘園制度（私的な大土地所有の形態）が生まれます。これに伴い土地（領地）争いなども起こるようになります。豪族は自らの土地（領地）を守るために武力を持つようになり、武士の棟梁が生まれてきます。

平安時代後期になると武士団が勢力を持つようになり、政治体制は天皇・貴族の政治から武家政治へと大きく変化していきますが、鎌倉幕府、室町幕府と時代が進むにしたがって、地方の武士団（領主、大小名）が台頭して、領地争い、権力争いが激しくなっていきます。

柏市域を含む東葛地方もこの流れの埒外にはいられず、千葉氏や高城氏などの武将が誕生しましたが、特に室町幕府時代以降は幕府の勢力争いに巻き込まれ、さまざまな戦が繰り広げられました。

戦国時代になると地方の豪族（領主）は、勢力のある大名などの勢力下に入ることにより保身を図らざるを得なくなります。東葛地方ではほとんどの豪族が小田原城の北条氏の麾下に入っていたため、豊臣秀吉との戦いにより東葛地方の有力武将のほとんどは討死するなどして滅び、その家臣たちの多くは農民として土着していきました。

江戸時代になって、東葛地域の土着の豪族・武将が突然に姿を消すのはこのような時代の背景によるものです。

2. 大和の力が柏に（弥生、古墳時代）

(1) 弥生時代

弥生時代に中国から朝鮮半島を経由して水田稲作とともに鉄器（青銅器、鉄

器)が伝えられました。

北九州地方に伝えられた水稻栽培は、西日本から東日本の各地へ広まってきました。また、弥生時代後期になると、小規模ながら製鉄が開始されます。鉄生産が本格的に行われるようになるのは古墳時代後期に中国山地が中心と考えられます。

鉄器の普及や土地を耕して食料を生産する生活は、社会を大きく変え、やがて貧富の差を生み、支配するもの・支配されるものが生まれ、原始国家とも呼ぶべき耶馬台国などの「クニ」ができました。

柏市域を含む東葛地域では、水稻・畑作の耕作に関する資料は見つかっていませんが、多く出土している紡錘車などの遺物から、畑作に主体が置かれ、織物による産業が盛んであったのではないかとわれています。

(2) 古墳時代

3世紀の後半になると、大和地方（奈良県）を中心に定型化した大型の前方後円墳が出現しました。前方後円墳は、大和政権がリーダーシップをとり、集団（地域国家）をこえた共通の文化的シンボルを浸透させたものです。

地方の首長たちは大和政権のリーダーシップを認め、自分が仲間であることを証明するために前方後円墳をつくり、連合内の力関係を古墳の大きさに反映させたと考えられます。

千葉県は全国で最も多く前方後円墳があり、手賀沼周辺の台地上には前方後円墳をはじめ、前方後方墳、円墳など多くの古墳が分布し、大和政権とのつながりが想定できます。

また、製鉄に関して特筆されるのは、手賀沼周辺から多くの製鉄遺跡が発見されていることです。製鉄は、鉄原料の採鉱⇒燃料である木炭の製造⇒製錬⇒鍛冶と高度な知識・技術を必要とする専門性の高い作業であり、国家的規模を必要とすることから、大和政権との強い結びつきが推測されます。

(3) 「総」の国の様子

古墳時代、千葉県のほとんどは「総」の国^{ふさ}注¹と呼ばれ、11の国造^{くにおみやつこ}（古代国家の地方を治める役人で長官）が大和政権から氏姓制度に基づき「姓（かば

ね)」を与えられました。上総国の国造の姓は「臣（おみ）」（有力豪族の姓）が多いが、下総国は広い地域に「千葉」「印播」「下海上（しもつうなかみ）」の3つの国造しかなく姓も「直（あたえ）」（大和政権に服した一般の地方豪族の姓）です。このことから、大和政権の支配は上総から下総へと進められたことがうかがえます。

柏市域を含む東葛地域には国造の存在は確認されていませんが、大規模な古墳分布から有力な首長がいたと考えられます。

注1：「古語拾遺」によると、天富命（あめのとみのみこと）が阿波国の忌部（いんべ）を率いて東国に赴き、麻を栽培させます。このとき良質の麻が成長したところを「総（ふさ：麻の古語）の国」と称したとの説話があります。（「柏市史 原始・古代・中世」）

3. 古代国家の形成・東国武士団のおこりと柏

(1) 都と柏を結ぶもの（奈良時代）

奈良時代は、公地公民を基礎とする律令制度（班田収授法）に基づき、天皇や貴族による中央集権的な全国支配が確立しました。

大宝元（701）年に制定された「大宝律令」では全国を国・郡・里という地域に分けて治めました。また、仏教の力で国を治めようと中央に東大寺、地方に国分寺、国分尼寺を建てました。

今の千葉県は安房、上総、下総の3つの国に分けられ、下総国には11の郡がありました。下総の国府、国分寺は市川市周辺におかれ、現在の柏市域は相馬郡、葛飾郡に属していました。

① 奈良時代の交通路

大化元（645）年の大化改新後、情報伝達手段や税の運搬等を目的に都と地方を結ぶ官道がいちはやく整備されました。当初の古代東海道は相模国（三浦半島）から海路で房総にわたり常陸国府（茨城県石岡市）に向かうものでした。その後、武蔵国（東京都・埼玉県）の開発が進むにつれて、「相模国—武蔵国—下総国—常陸国」の道が本道になりました。

このような主要道には30里（約16km）ごとに駅家と役所が置かれました。下総国には5駅が置かれ、井上・茜津・於賦には馬10頭が置かれたといま

す。なお、茜津の場所は柏市藤心付近であり、於賦の場所は柏市北柏付近、我孫子市新木、湖北周辺のどこかと考えられています。北柏にあった中馬場遺跡は、於賦の駅家の地で、古道に沿った拠点集落として栄えたという説もあります。

また、記録によると、8世紀後半には東北地方への「蝦夷征伐」のため下総国から兵士300人、兵糧米6,000斗を出すことが命令されており、奈良時代に下総国は東北経営の前進基地として大きな役割を果たしていたことがうかがえます。

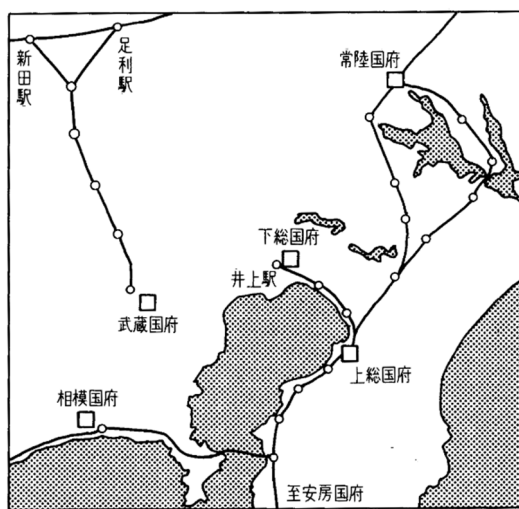
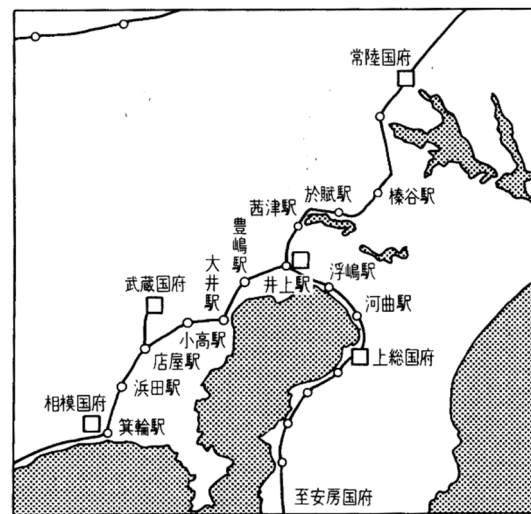


図1 古代東海道 (奈良時代)



(平安時代) [延喜式]

(「柏市史原始・古代・中世編」)

② 都に納めたもの

律令制度を支えたものは地方からの租税（租・庸・調）でした。

税を納めたり労働したりするための移動は公民が自ら食料を持参して行うことと決められており、長旅となりました。

当時の記録をみると、下総から都までは往路 30 日（貢納物は背負って行く）、帰路 15 日と定められていました。

奈良・正倉院に納められている麻袋には、天平 17
やはぎべのまろ
 (745) 年の年号や矢作部麻呂という大井郷（現在の柏市大井付近）の村人の名が見られます。



下総国相馬郡大井郷戸主矢作部麻呂調并庸布壹端

写真1 布袋銘

(2) 将門旋風ふきあれる（平安時代）

平安時代になると都では藤原氏が力を伸ばし、摂政や関白の職につき 9 世紀の中頃から政治の実権を握るようになりました（摂関政治）。そのため、国司として地方に下った貴族や天皇の子孫の中には、そのまま朝廷の権威を利用して、その土地に住み着くことが多くなりました。桓武天皇の子孫である平氏も坂東に住み着き、坂東平氏となったのも同じ理由からでした。この平氏の一族は、常陸・下総・武蔵・相模などを治める役人となり、やがてこの地域の民衆をまとめ、武士の棟梁として領地を広げて、力を大きくしていきました。

① 平将門の登場

関東一円をまきこんだ平将門の乱は、将門が承平 5（935）年に叔父・国香を殺したことがきっかけに起こりました。その原因は土地をめぐる争いといわれています。その後、他の豪族をまきこんでたびたび争いを続けるうちに、将門の名前は周辺に知られるようになりました。

天慶 2（939）年になると将門は朝廷を相手に争うことになりました。常陸の藤原玄明が国司に反抗して税を納めず、将門に助けを求めてきました。将門は玄明を助けたばかりか、求めに応じて常陸の国府を攻め、建物を焼き払ってしま

いました。その後、下野、上野を攻め、国司を京都に追い払ったことで、朝廷への反逆は明確なものになりました。

やがて、将門は「新皇」（新しい天皇）と名のり、下総国猿島の石井（現在の坂東市）に「王城」をつくり朝廷に反抗しました。しかし農繁期で大多数の兵が村に帰った隙をつかれ、あっけなく敗北してしまいました。将門を鎮めたのは、地方に住み着いた国司の子孫、藤原秀郷や国香の子貞盛などでした。

地方では武士が大きな力を持ちはじめ都の貴族もその力を認めざるを得なくなったのです。

こうして、将門の乱は収まりましたが、「将門記」には「稲束を田に敷きつめて人馬がわたった」とか「幾千の人家を焼いた」など、戦乱の激しかった様子が記されており、各地に伝説が残されました。また、将門ゆかりの地である下総地域には、時の権力者に反抗し、国司の圧政に苦しめられた民衆が、将門を英雄として崇める将門信仰が受け継がれています。

柏市岩井には将門を祀る神社が残るだけでなく、将門を裏切った桔梗御前を疎んで桔梗を植えず、また将門の調伏を祈って建立された成田山には詣でないという風習があります。



写真2「将門神社」（柏市岩井）（撮影：野田）

② 下総の荘園のおこり

8世紀以降、班田収授法をもとにした土地制度は、公民の逃亡や荘園（豪族の私有地）の拡大によって次第に崩れていきました。広大な未開地を残した下総一帯も、9世紀に入ると荘園がさかんにつくられました。多くは平氏一族のものといわれています。将門の乱の後、相馬郡は将門の叔父平良文の領地になり、代々その子孫が受け継ぎました。

やがて、「坂東八平氏」と称される下総国の千葉氏、上総国の上総氏、武蔵国の秩父氏、相模国の三浦・土肥・大庭・梶原・長尾氏などの武士団が成長していきます。

大治5（1130）年平常重（千葉常胤の父）は自分の領地である相馬郡布施郷を、伊勢神宮に寄進し、「相馬御厨」（相馬郡の伊勢神宮の荘園、およそ我孫子市と取手市を中心とした辺り）としました。平常重は自分の土地を名目だけ伊勢神宮の領地とし、自分は下司職（荘官）になり、不輸^{ふゆ}の権（自分の領地の租税を納めなくともよい権利）を得ました。このことが、他からの脅威から逃れることと同時に荘園の実質的な支配を確実にしたのです。

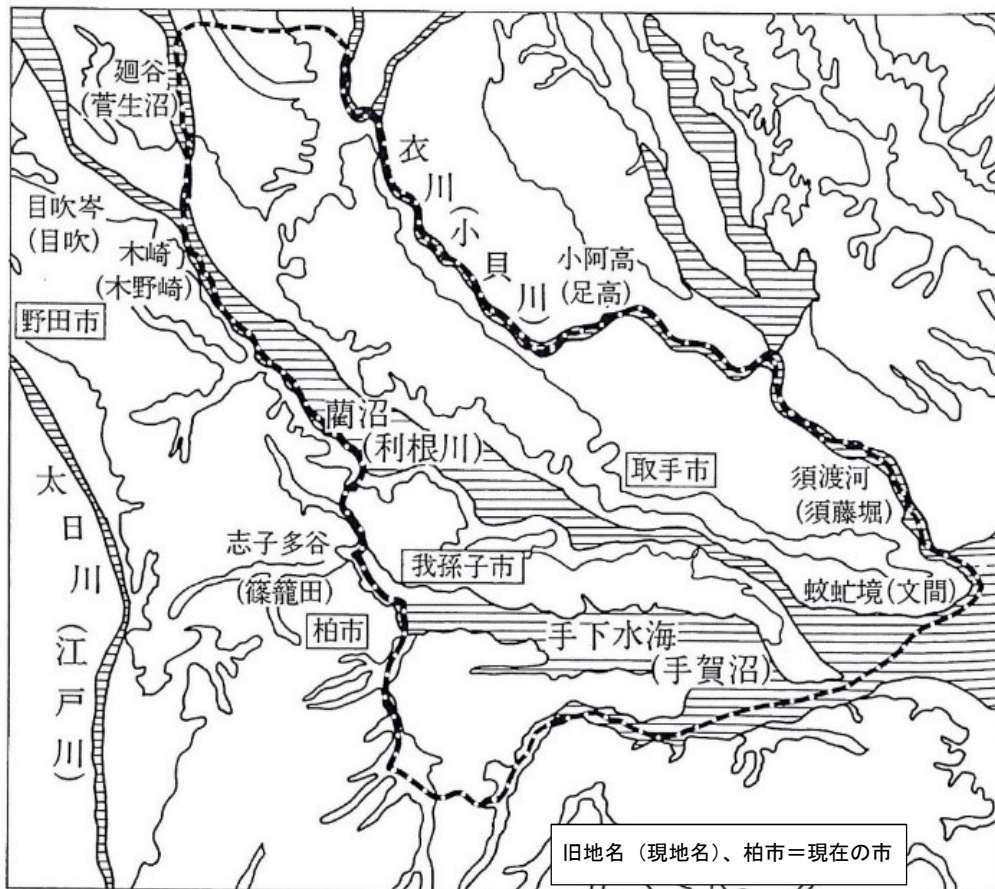


図2 相馬御厨の四至（東西南北の四方の境界）

（「人物でたどる日本荘園史」から引用して一部加筆）

4. 武将の争乱のころの柏

(1) 頼朝挙兵を手助けした千葉氏（鎌倉時代）

① 源頼朝と柏

源頼朝は、源氏の再興のために伊豆で挙兵しましたが、石橋山の戦い（相模国）で敗れ、房総半島の安房に逃れました。その時、頼朝を手助けしたのが下総国で大きな勢力を持っていた千葉常胤^{注2}です。頼朝に協力した千葉常胤は、その功績によりやがて下総国の守護となり大きな影響力を持つようになってきました。

頼朝は、千葉氏と敵対する常陸国の佐竹氏との戦いの前に野生の良馬を見つけてこれを捕らえさせ、その馬を呼んだ場所が柏市の「呼塚^{よばつか}」であるという言い伝えが残っています。当時から名馬の産地とされていたようです。また、柏

市松ヶ崎には「頼朝通」という地名も残っていたといわれています。

注2：千葉常胤は、阪東平氏の流れをくみ代々下総の国を根拠地とすることから「千葉」氏を名乗るようになりました。

② 千葉氏の6人の兄弟が下総一帯に勢力を伸ばした

頼朝に協力した功績で、千葉常胤の6人の子が下総各地に勢力を伸ばしていきましました。

柏市域を含む千葉県北西部一帯及び茨城県南部に広がる相馬御厨一帯を支配したのは、二男の千葉師常（相馬氏を名乗る）でした。これが相馬氏の始まりで、相馬氏の支配は、室町時代まで続きます。

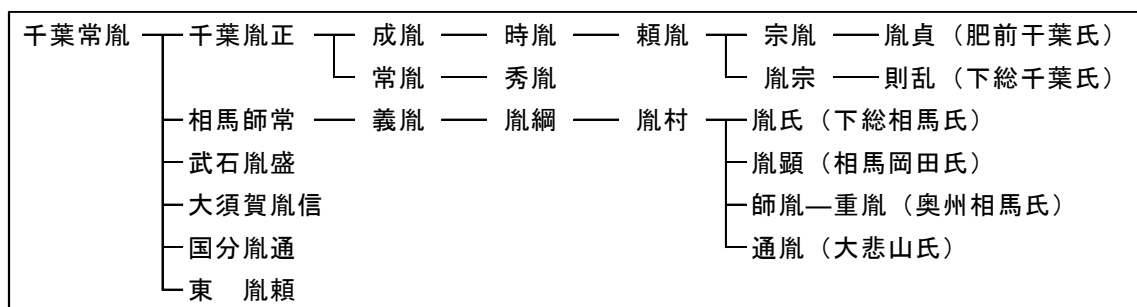


図3 千葉氏略系図（「柏市史 原始・古代・中世編」から引用）

鎌倉時代に柏周辺を支配した相馬氏の城（館）がどこにあったか、今のところはっきりと分かっていません。発掘調査で大きな堀が見つかった「根戸」、古文書に記録がある「増尾」などにあったのではないかとされています。

源義経の活躍を描いた「義経記」には、その家来に増尾十郎という者がいて活躍したと記されています。この増尾十郎こそ増尾出身の武士で、相馬氏に深い関係のある者ではないかともいわれています。

③ 阿弥陀如来坐像をめぐる謎

柏市増尾の万福寺は、江戸時代初期に建てられた寺ですが、ここには平安時代の終わり頃の作という阿弥陀如来坐像がまつられています。

万福寺には境内に阿弥陀堂という小さなお堂があります。これは、当時から

この地域に極楽浄土への往生を願う浄土信仰が広まっていたことにつながるといわれています。さらに、同じ境内に妙見様がまつられている祠が残っています。妙見様は、相馬氏が代々信仰している守り神でした。阿弥陀如来坐像は、妙見様とともに手厚く保存されていたことがわかります。

このほか、柏に伝わる鎌倉時代の寺社として知られているのは、藤心の八幡神社、その南にある宗寿寺、布施にある善照寺などです。これらの周辺には人々が村を作り住んでいたと思われます。この頃の文書を見ると次のような村が名を連ねていることがわかっています。「わしのやむら」「みのわむら」「いつみのむら」「おほ井のむら」「ますおのむら」「たかやなきのむら」「ふちかやのむら」、これらはいずれも相馬氏が支配する村でした。

(2) 境根原の決戦（室町時代）

① 南北朝の争いの時、千葉氏はどのように行動したか

柏周辺を領有していた千葉氏の一族である相馬氏は、そのまま相馬御厨に残った一族と、源頼朝による奥州合戦の軍功で得た奥州の所領（現在、南相馬市あたり）へ本拠を移していた一族に分かれていきました（当時はまだ相馬御厨の一部の所領を持っていた）。

鎌倉幕府が滅亡する時、千葉氏・相馬氏は南朝（後醍醐天皇ら）に味方する一族と北朝（足利尊氏ら）に味方する一族に分かれました。相馬氏の多くは、南朝の新田義貞に従い、やがてライバルであった足利尊氏に滅ぼされてしまいました。北朝に味方した千葉氏は、守護となり下総国をそのまま領有することになりました。

② 相馬御厨をめぐる争い

相馬御厨は、伊勢神宮（三重県）の荘園でした。しかし室町時代になると、実際に土地を管理する相馬氏の力が強くなり、伊勢神宮への年貢も滞りがちとなったといわれています。そこで、伊勢神宮から何度も年貢を送るよう催促や訴えがあり、争いになりました。この頃から、荘園領主の力が次第に弱くなり、土地を治める武士が力をつけていったことがわかります。

この頃、税など大量の荷物を運ぶための交通路は、水上交通が中心でした。

当時は、太平洋までつながる現在のような利根川はできていなかったもので、手賀沼やそこにつながる小河川の水路を関宿（野田市関宿町）近くまでさか上り、そこから陸路を経て再び大田川（江戸川）を下り、さらに江戸湾に出て海路を使うという方法が取られたようです。

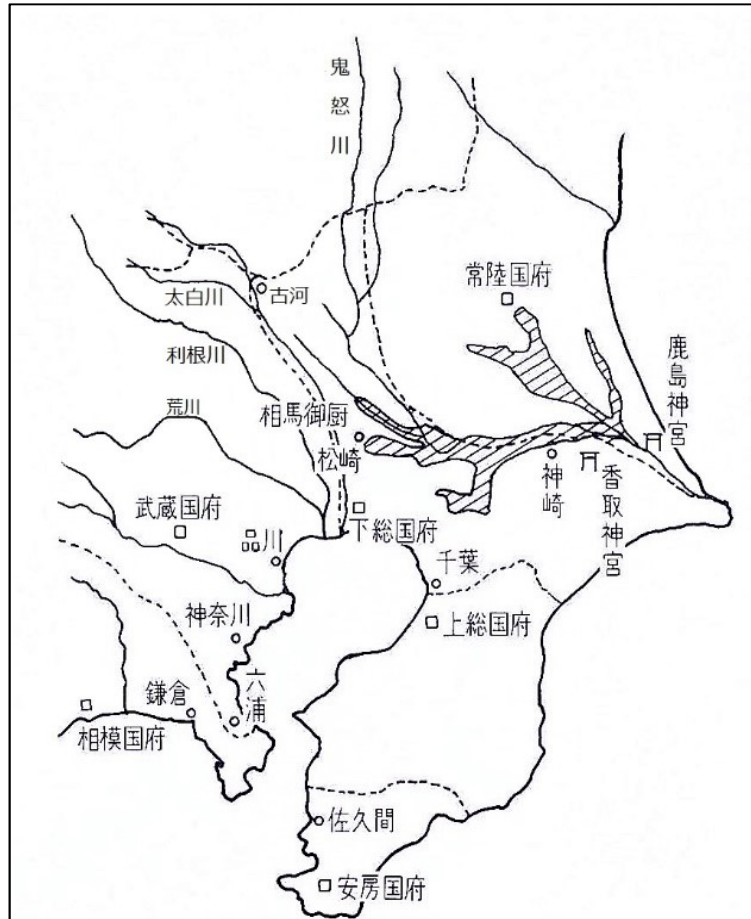


図4 南関東要図（「柏市史 原始・古代・中世編」から引用して一部加筆）

③ 境根原の合戦とは

応仁の乱が終わる頃、東葛飾地方一帯も土地の主導権をめぐって激しい戦が繰り広げられました。文明 10（1478）年かねてから対立関係にあった武蔵国の太田道灌と下総国の千葉孝胤が激しい合戦を繰り広げた場所が境根原（柏市光ヶ丘周辺）です。

この時、小金原（松戸市）に陣取った千葉孝胤に対し、太田道灌は国府台（市川市）に軍を進めました。両軍が衝突した境根原では、戦いは一日中続い

たと記録に残っています。

野戦を得意とした道灌の軍は、千葉孝胤の重臣である原氏や木内氏を討ち、高田（柏市高田）に居を構える匝瑳氏をも討ち死にさせ、孝胤を佐倉に退かせてしまいました。

戦いの後、太田道灌は敵味方の区別なく戦死者を埋葬したといわれ、光ヶ丘周辺には、団地ができる前までたくさんの塚が残っていたそうです。

市内には道灌堀（豊四季）や道灌橋（根戸）などの地名が残っています。

④ 合戦・武士にまつわる地名

藤ヶ谷には「念仏塚」という地名があります。これは戦いで逃げてきた落ち武者が寺で念仏を唱えた場所だといわれています。その近くには、激しい戦いで矢が何本も飛来して橋のようだったということから「矢の橋」という地名も残っています。また境根、根戸のように、地名に「根」のつく場所は境界線、つまり領地の境だったようです。

(3) 上杉氏と北条氏の戦い （戦国時代）

① 戦乱に巻き込まれる東葛地方

応仁の乱の頃になると室町幕府の力は弱くなり、地方の守護や大名（領主）が武力によって力をつけてくるようになります。

そのころ、千葉氏よりも勢力を増してきたのが安房国の里見氏です。天文 7（1538）年、里見氏は北関東の足利氏と同盟（小弓公方軍）を結び、相模国から攻めてきた北条氏（古河公方軍）と戦いました。これが、第1次国府台合戦です^{注3}。激しい戦いの末に北条氏が勝利すると、敗れた里見氏はいったん安房に退きました。

里見氏は、永禄 7（1564）年、今度は越後の上杉謙信と同盟を結び、北条氏と戦いました。これが第2次国府台合戦です^{注4}。この戦いで重要な役割を果たしたのが小金城主の高城氏^{たかぎ}です。高城氏は南下してくる上杉氏を食い止め北条氏の勝利に貢献しました。そして、東葛飾地方一帯は、高城氏が小金城を本拠にして治めるようになりました。

注 3、4：室町幕府は関東 10 か国統治のため鎌倉公方を設置したが、後年、勢力争いの結果、鎌倉公方が本拠を古河に移し、その後古河公方が分裂して小弓公方が起こり、古河公方、小弓公方が勢力下の武将を巻き込んで戦いを繰り返しました。

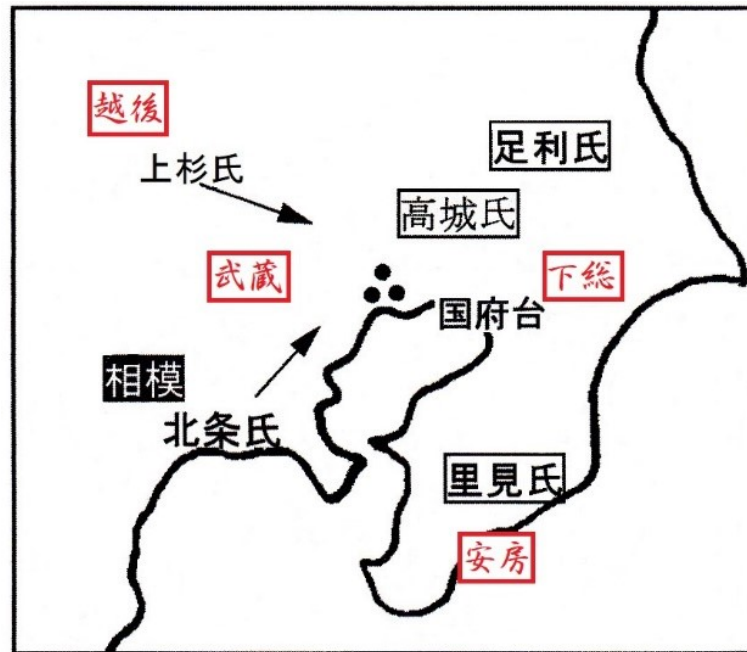


図5 国府台合戦の模式図（「郷土かしわ」から引用して一部加筆）

② 天下の統一と柏周辺

織田信長の時代になると、東葛飾地方は引き続き北条氏とその配下の高城氏が支配しました。

天正 17（1589）年、信長の後に天下を取った豊臣秀吉は、徳川家康らとともに関東で最大の勢力を持っていた北条氏を小田原城に包囲しました。この時、下総地方の領主である千葉氏や高城氏は小田原城内に立てこもっていました。そこで、豊臣秀吉は、小田原城に集まっていて領主が留守になっている東葛飾地方を攻め、支配下においてしまいました。やがて小田原城も落城、豊臣秀吉は天下統一を成し遂げました。

その後、徳川家康が江戸を本拠にすえ、江戸幕府が開かれます。それとともに、小金城をはじめとして東葛飾地方にあった多くの城が取り壊され、領地は江戸幕府に没収されてしまいました。千葉氏や高城氏の家臣の多くは、下総地方や東葛飾地方に農民として土着していきました。

③ いろいろな職業

室町時代の頃になると産業が発達し世の中にはいろいろな職業が生まれました。この頃の資料である「本土寺過去帳」（松戸市殿平賀の本土寺に残る古文書）によると、武士や僧侶、農民だけでなく現在にも残る仕事がいくつも記されています。

柏市の酒井根、戸張、高田に番匠（大工）をして生計を立てていた人のことが記録に残っています。この頃の大工は、武士の屋敷やお寺を作る宮大工がほとんどで、戸張の大工は本土寺の造営に参加したとも記録されています。

当時として貴重な塩を売る塩売りの彦四郎という人物が酒井根に住んでいたことも記録に残っています。このことから、塩が商品として流通していたことがわかります。さらに音楽に合わせて滑稽に踊る猿楽という演芸を営む人（曲舞々）が現在の豊四季周辺にいたことも記録されています。そして時には、有名な寺で猿楽を演じたこともあったようです。これらの地域には人々が住み、やがて村がつくられていきました。



図6 上記職人図版3枚は柏書房「資料日本歴史図録」から転載

④ 地域に残る城跡

柏市域には、公園となっている増尾城跡や市の指定文化財の松ヶ崎城跡をはじめとして、戸張城跡や箕輪城跡など、戦国時代のものと考えられる城跡が多く確認されています。近年、考古学の分野で研究が進んでいますが、沼沢地や河川に沿って城が築かれていたり、狭い地域に複数の城跡が見られたりするなど、多くの疑問が残されており、当時の様子は十分に解明できていません。



図7 戦国時代の城跡（「郷土かしわ」から引用）

II 柏市の製鉄遺跡

1. 概要

鉄の歴史は、世界的には、紀元前 20 世紀から始まり、日本では、諸説ありますが、早くは弥生時代、遅くとも奈良時代には製鉄が始まったと考えられており、柏でもその遺跡が発掘されています。ただ、この製鉄がその後どのような経緯をたどったかは、定かではありません。しかし、この柏でその昔、製鉄の高度技術集団が大いに活躍した事実があったのです。

2. 世界の鉄の歴史

世界の製鉄の歴史で現在最古の製鉄技術とされているのは、トルコ中部のカマン・カレホユック遺跡で BC 20 世紀ごろにはすでに鉄を生産する技術が存在していたとされています。北方からここに侵入したヒッタイト人が、この製鉄技術をさらに発達させ、その技術を秘密として、鉄を独占し、軍事的に利用することで帝国を築きました。BC 1,200 年ころヒッタイトが滅亡すると、中近東一円に鉄が出回りましたが、技術の普及にはいたりませんでした。

中央アジアに伝わったのは BC 10 世紀ごろで、中国にはヒッタイトの滅亡から 8 世紀後の BC 4~3 世紀ごろに伝わっています。BC 3 世紀、秦の始皇帝は全国に鉄を司る鉄官を配置、さらに前漢武帝の時代、鉄は塩と同様に国家の専売制となり、鉄官は 49 カ所に及び漢の重要な基幹収益となりました。さらに、時代は下って、朝鮮半島では AC 1 世紀に製鉄が本格化しました。

3. 日本の製鉄史

日本で製鉄（鉄の精錬）が始まったのは、いつころからでしょうか。確実といわれる製鉄遺跡は 6 世紀前半まで遡れますが、5 世紀には大規模な鍛冶集団が成立して、6 世紀には多数の製鉄・鍛冶炉からなる製鉄コンビナートが形成されていたことから、5 世紀には既に製鉄は始まっていたと考えるのが妥当であるという意見があります。

更に、製鉄炉の発見はないものの、弥生時代に製鉄炉があったとする意見もあります。その論拠は 1) 弥生中期以降、石器から鉄器への転換が急速に全国的

に進んだ。2) 外国では鉄器の使用と製鉄は同時期に始まった。3) ガラス製作技術があり、1,400～1,500℃の高温が得られていた。4) 大型銅鐸の鑄造など優れた冶金技術があった。という考古学的背景です。

当時のすべての鉄原料は朝鮮半島に依存していたという説がこれまで主流でしたが、最近発掘された広島県の小丸遺跡（三原市）、京野遺跡（千代田町）、西本6号遺跡（東広島市）は弥生時代後期から古墳時代にかけての製鉄址ではないかといわれています。鉄鉱石を使用する古代の製鉄址は山陽地方と琵琶湖周辺に限られています。山陰側その他は砂鉄を原料に用いており、製鉄技術の伝来ルートに違いがあることを暗示しているのかもしれませんが。滋賀県には60か所以上の製鉄遺跡があり、近江は古代における近畿地方最大の鉄生産地でした。大和にとって近江は地政学上の要地でしたが、それだけではなく資源的にも重要な場所でした。

古墳時代から奈良時代にかけて、鉄鉱石を用いた製鉄遺跡が中国山地の山陽側、近畿地方の近江で発見されていますが、平安時代以降は全国的に砂鉄原料に変わりました。古書によれば、出雲・伯耆・備後・備中・美作・播磨などの中国地方を中心に、筑前・筑後・肥前・能登・常陸・上野・越後・武蔵・相模・陸奥など全国にわたって砂鉄の産出が知られていました。

弥生時代末期に伝えられた製鉄技術は「野たたら」といい、山の中程の風通しの良い斜面に炉を作って、砂鉄と薪を積み上げて、自然の風力によって幾日も火を燃やし、わずかな鉄を得ていました。やがて技術の進歩に加えて、風雨の憂いなく操業できる屋内工場となるのが13世紀の半ばです。

たたら吹き精錬法の屋内工場は、「高殿」と呼ばれる特殊な建物で、この移行によって、鉄は産業として量的生産が可能になったといえるでしょう。たたら精錬に用いられるのは砂鉄です。砂鉄は採取される場所により、山砂鉄・川砂鉄・浜砂鉄に分けられます。上質なのは風化した母岩から直接採取する山砂鉄で、たたら精錬では山砂鉄を使うのが普通でした。たたら吹きによる製鉄業は、慶長年間時代を境に勃興し、その後経営の無秩序から、一時衰えましたが、江戸中期になるとふたたび興隆して、野たたらから屋内のたたらへと進化し、その後明治10年代に到るまではたたら吹きの全盛時代でした。しかし、明治政府による近代製鉄の導入や、原材料である木炭生産の制約（「鉄は大量の

木材（森林）を食い尽くす」といわれる）によって徐々に衰退に向かいました。たたらの炎を見つめてきた職人・古老達も、生き残っているのは極めて少なくなってきました。

そうした状況でも、江戸中期の製鉄業再興に際して著わされた貴重な製鉄技術書が記録として残されていることが、今日のたたら製鉄法の復元へと通じました。今日でも、ただ1か所島根県鳥上で年に1回、昔ながらの「鉄穴流し」が行われ、この方法で山砂鉄から木炭銑に精錬され、安来の日立金属に送られ、高級特殊鋼の原料となっています。

4. 柏市の製鉄遺跡

柏市内の製鉄遺跡は、千葉県製の鉄遺跡分布地図によると 63 か所ありますが、利根川流域と手賀沼南岸地域に分布します。なかでも、旧沼南地域は53か所と県内トップの千葉市の59か所に次ぐ密集地帯となっています。このように市内には、製鉄遺跡が多く分布していますが、調査歴もあり年代や構造が明確なものは、花前Ⅱ遺跡（船戸）、宮後原製鉄遺跡（大島田）、若林Ⅰ遺跡（藤ヶ谷）、松原製鉄遺跡（若白毛）、天神向原遺跡（大井）、宿ノ後遺跡（布施）、榎方遺跡（岩井）の僅か7か所を数えるだけです。時期は、花前Ⅱ遺跡が平安時代、他は奈良時代と考えられています。花前Ⅱ遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が22軒調査されていますが、最も注目されるのは、斜面部で見つかった9基の製鉄関連遺構です。その内訳は、製錬炉6基、精錬炉3基となっています。多くの鋳型も出土しており、鉄素材から鉄器製品まで一貫した生産を行った最先端のハイテク工場だったと考えられます。

古代の製鉄は、まずは製錬炉で不純物を取り除き粗製の鉄材を取出し、次に精錬炉で精錬して初めて加工可能な鉄材が得られました。そしてこれを鍛冶炉で熱して鉄製品を作りました。

製錬炉はその形態から、ユニットバスのような長方形箱型炉と円筒状の半地下式の竪型炉に分けられ、どちらも、台地斜面に構築されているのが特徴です。若林Ⅰ遺跡、松原製鉄遺跡は、箱型タイプで、宮後原遺跡、花前Ⅱ遺跡は竪型タイプです。従来の研究により、箱型は、西日本を中心に分布しており、竪型より早い時期登場するとされていますが、千葉県においては、両者が混在

して発展していったものと考えられます。

製錬炉は木炭と砂鉄を交互に投入し、溶解させ、不純物を排除するために、炉内温度は 1,300℃以上を常時保たねばなりません。それには、燃料となる木炭の燃焼温度を高温に保つために^{ふいご} 鞴と呼ばれる送風装置が必要となります。製鉄の原料については、一部には鉄鉱石を使用している地域もありますが、東日本では、砂鉄が主流となっています。製鉄には多量の木炭を必要としますので、炉の周辺には炭焼窯が必ず数基存在します。また、古代製鉄における送風装置となる鞴は「踏み鞴」で、長方形の穴を掘って、中心に軸となる丸太を置き、そこに踏み板を被せて、シーソーのように人が交互に踏むことによって起こした風を、送風管を通じ羽口から炉内に送り込みます。作業中は昼夜を問わず踏み続けなければならない、大変な労力を必要とします。大島田の宮後原製鉄遺跡では、この踏み鞴が比較的良好に保存されていました。

精錬炉も製錬炉と工程は似ています。それほど大掛かりな構造ではなかったようですが、製錬炉と同一の斜面や台地上の集落内で作業されています。

鉄器の普及により、耕地面積は飛躍的に拡大し、武器の殺傷能力が高まりました。製鉄遺跡は、古代の柏に当時のハイテク技術を持った製鉄技術者集団が多数いたことを物語っています。

平将門の本拠地下総国北西部には、古くから良馬を生産する大結馬牧や長洲馬牧などの官営の牧が存在しました。また、武具や馬具の素材である鉄の生産も平安時代になると活発になりました。将門は、こうした下総の馬と鉄に支えられた武装私営田領主の一人でした。将門の軍団の中核は騎馬集団でした。将門が寡兵をもって大軍を撃ち破ることができたのは、騎馬軍団の機動力を巧な用兵によって最大限に発揮し得たからに他なりません。



写真3 花前Ⅱ遺跡の竪型炉（製錬炉）

「常磐道の遺跡をさぐる」から引用

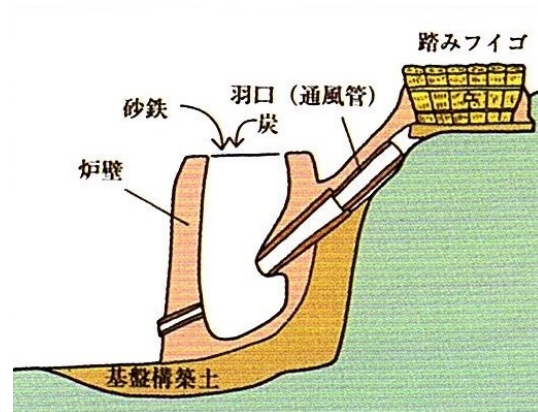


図8 竪型炉構造模式図

「悠久の歴史を旅して」から引用

5. たたら製鉄の概要

たたら製鉄の工程は概ね次の通りです。

- | | |
|--------------|---------|
| ①砂鉄の採鉱 | ④製鉄炉の製造 |
| ②製鉄木炭用広葉樹の伐採 | ⑤製鉄 |
| ③木炭の製造 | ⑥鍛冶 |

「日刀保たたら」の事例に基づくと、たたら製鉄において、1回の操業で使用する資材は、砂鉄約8t、木炭約13t＝原木材90tを要し、これより、約2.5tのケラが生産され、うち玉鋼は0.8～1tです。また、採鉱の際には、多量の水を必要とします。90tの原木材を生産するには凡そ約1haの収量に相当し、輪伐期30年として、継続生産するには30haの森林を伐採する必要があります。年間60回の操業として、1800haの森林を要します。従って、たたら製鉄は大量の水と木材の供給を必要とし、その立地は、河川の沿岸の広大な森林地帯が適しています。

但し、この数値は、日刀保^注の実績で、柏市の遺跡において生産されていた製鉄規模は、上記より小規模で玉鋼の生産効率もより低いと思われます。

注；日刀保・・・公益財団法人日本美術刀剣保存協会

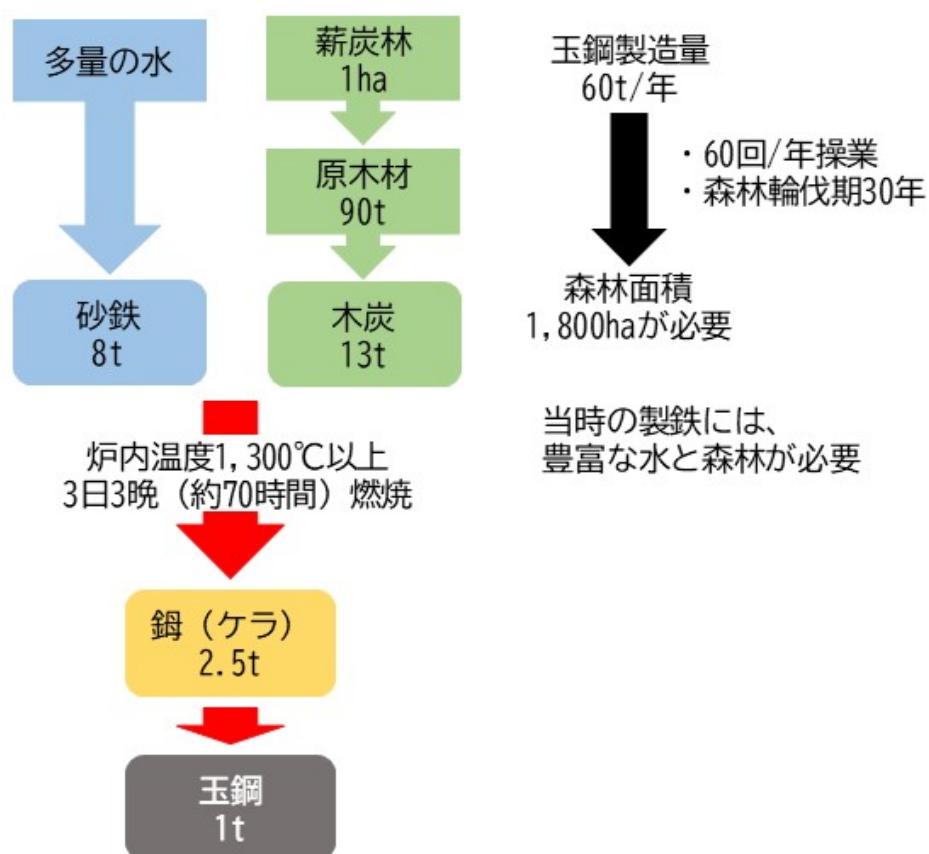


図9 たたら製鉄の工程・材料（数値は日刀保実績から）

参考文献

- 「郷土かしわ」 柏市教育委員会 平成 30 年度版
- 「柏市史 原始・古代・中世編」 柏市教育委員会
- 柏市 HP「将門伝説と相馬氏」最終更新日 2017. 3. 26、 2019. 02. 08 参照
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280400/p007290.html>
- 「人物でたどる日本荘園史」 阿部猛・佐藤和彦編集 東京堂出版 1990 年
- 「資料日本歴史図録」 笹間良彦編著 柏書房 1992 年
- 「柏の歴史よもやま話」 浦久淳子 崙書房 1998 年
- 「柏市史(原始古代中世 考古資料)」 柏市教育委員会 平成 31 年 2 月 22 日発行
- 「常磐道の古代製鉄遺跡」 吉田秀享 公益社団法人福島県文化振興財団
2018 年(平成 30 年)
- 「常磐道の遺跡をさぐる」 千葉県教育振興財団 平成 30 年 2 月講演会資料
- 「悠久の歴史を旅して」 千葉県教育振興財団 平成 29 年 7 月 14 日発行
- 「千葉県の歴史」 石井進・宇野俊一 2012 年 9 月 25 日版 山川出版社
- 「鉄 一塊の鉄が語る歴史の謎」 立川昭二 1966 年 7 月 25 日初刷発行 学生社
- 「シンポジウム 鉄と帝国の歴史」 愛媛大東アジア古代鉄研究センター
(2008)
- 埋もれた文化財の話「近江の古代製鉄について」 滋賀県埋蔵文化財センター
- 「古代の製鉄工場」(柏市教育委員会「歴史ガイドかしわ」2007 年)
- 「常磐道の遺跡をさぐる」ー悠久の歴史を旅してー(講演要旨) 千葉県教育振興財団 平成 30 年 2 月 10 日講演
- 千葉県森林インストラクター会 会報 2007. 1 (No. 19)
- 「日本全史」 ジャパン・クロニック 講談社

柏市とその周辺の歴史年表

※本年表は「郷土かしわ」の歴史年表をベースとし、末尾欄外に示す引用・参考文献より重要と思われる「できごと」を補足した。

時代区分		西暦	年号	主なできごと
原 始	旧石器時代	約4万年前 約3万年前		・ 日本列島に最古の明確な石器が出現 ・ 常磐自動車道柏地区に旧石器時代の遺跡が現れる（聖人塚、中山新田、元割遺跡など） ・ 環状ブロックの形成（中山新田Ⅰ遺跡） ・ 長期間の人々の営み（聖人塚遺跡） ・ 本の木型石槍の生産（元割遺跡）
	縄文時代	約1万5千年前	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	・ 土器の使用が始まる ・ 狩猟や採集の生活が続く ・ 本格的なムラがつくられ始まる（鴻ノ巣、花前遺跡） ・ 前期前葉の黒浜式期の集落が出現（若葉台遺跡、花前Ⅰ遺跡） ・ 貝塚を中心に大集落ができる（布施貝塚、林台遺跡） ・ 中期前葉の阿玉台式期の集落が展開（聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡、水砂遺跡） ・ 中期中葉～後葉の環状集落（小山台遺跡） ・ 中島遺跡、岩井貝塚 ・ 宮根遺跡
古 代	弥生時代	前10世紀後半～前8・7世紀 紀元後239		・ 大陸から北九州に稲作が伝わる ・ 大陸から青銅器、鉄器が伝わる （今のところ柏市内では弥生時代 早・前・中期を示す明確なものは発見されていない） ・ 邪馬台国の女王卑弥呼が倭国王になる ・ 笹原、中馬場遺跡（弥生後期）
	古墳時代	538 593 飛鳥時代 607 645 646 701	大化元 大化2 大宝元	・ 前方後円墳がつくられる（大王が支配する大和政権） ・ 戸張一番割、戸張城山、石揚遺跡（古墳前期） ・ 北ノ作1号・2号墳 ・ 弁天古墳（古墳・中期） ・ 花野井大塚古墳 ・ 小規模な集落が出現（花前Ⅱ-1遺跡、矢船遺跡） ・ 集落規模の拡大（上貝塚遺跡） ・ 百済から仏教伝わる ・ 聖徳太子が推古天皇の摂政になる ・ 柏・我孫子あたりは朝廷の御名代（みなしろ）として直接支配される ・ 小野妹子を遣隋使として隋に送る ・ 市内各所に小円墳がたくさんつくられる ・ 総の国を二分して南部を上総、北部を下総とした ・ 大化改新の詔が発布される ・ 大宝律令ができる ・ 下総国府（市川市国府台）置かれる ・ 根戸周辺に大集落ができるようになる（中馬場遺跡）
	奈良時代	710 721 741	和銅3 養老5 天平13	・ 平城京（奈良）に遷都 ・ この頃鉄器生産を伴う集落の出現（花前Ⅰ遺跡、花前Ⅱ-2遺跡） ・ 養老5年「下総国倉麻（そうま）郡意布郷（おふのさと）」戸籍つくられる（ほとんどの人が「藤原部」姓をもつ） ・ 国分寺建立の詔 ・ 下総国分寺建立 ・ 武蔵国-下総国-常陸国（東海道）の交通が多くなり、駅馬が増強される
	平安時代	794 823 935 1126 1130 1156 1167	延暦13 弘仁14 承平5 大治元 大治5 保元元 仁安2	・ 平安京（京都）に遷都 ・ この頃本格的な製鉄の展開（花前Ⅱ-2遺跡） ・ 空海、布施弁財天に紅竜山東海寺を建立（東海寺縁起による） ・ 平将門反乱をおこす ・ 相馬御厨成立 ・ 平常重、布施郷（相馬御厨）を伊勢皇太神宮領に寄進（志子多谷、手下水海の名みえる） ・ 保元の乱に、千葉介常胤（相馬郡司）、源義朝に従って参加 ・ 平清盛が太政大臣となる

時代区分		西暦	年号	主なできごと
古代	平安時代	1180	治承4	・源頼朝伊豆に拳兵 千葉一族協力する
		1185	文治元	・千葉介常胤本領安堵（相馬御厨の下司職）を得る ・守護、地頭の設置 ・千葉介常胤「下総一國守護職」に補任
中世	鎌倉時代	1192	建久3	・源頼朝征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉に幕府を開く
		1204	元久2	・相馬次郎師常（常胤の次男）没
		1227	嘉禄3	・相馬五郎能胤が娘土用（むすめとよ）に相馬御厨内の手加、布瀬、藤心、野木崎らをゆずる
	南北朝	1334	建武元	・建武の新政
	室町	1338	延元3	・足利尊氏、征夷大將軍となり幕府を開く
		1462	寛正3	・高城胤忠、根木内城構築
	戦国時代	1467～77	応仁元	・応仁の乱
		1478	文明10	・太田道灌、国府台に陣し、千葉孝胤と境根原で戦う
		1537	天文6	・高城胤吉、小金大谷口城構築
		1538	天文7	・北条軍と小弓軍国府台に戦う 北条軍勝利
近世	安土桃山	1564	永禄7	・国府台後の戦、里見氏、北条軍に敗れる
		1573	天正元	・室町幕府滅ぶ
		1590	天正18	・豊臣秀吉の統一
	江戸時代			・高城氏滅ぶ
		1600	慶長5	・関ヶ原の戦い
		1603	慶長8	・徳川家康將軍となり江戸に幕府を開く
		1614	慶長19	・江戸幕府、小金三牧と佐倉七牧を管理する
		1616	元和2	・幕府七里ヶ渡を定船場とする
				・本多正重が相馬郡内に1万石を領す
		1641	寛永18	・江戸川開通
		1641～43	寛永18～20	・寛永の大飢饉
		1654	承応3	・伊奈備前守忠次、利根川東遷に成功
		1663	寛文3	・大青田村と船戸村の草場をめぐる争いで双方の名主入牢
		1671	寛文11	・江戸商人（海野屋作兵衛ら17名）による手賀沼干拓始まる
		1702	元禄15	・大室村と高野村草場をめぐる争いで3人死に、双方の名主入牢
		1708	宝永5	・戸張村と大井村草場をめぐる争い
		1724	享保9	・利根川沿いに流作場生まれる
				・布施河岸が正式に成立
		1725	享保10	・小金原で將軍吉宗鹿狩、村々より勢子、人足差し出す
				・このころより代官、小宮山奎之進、牧付新田を開発させはじめる
		1726	享保11	・小金原で將軍吉宗鹿狩
		1727	享保12	・幕府年貢増収をねらって手賀沼干拓を始める
		1729	享保14	・手賀沼開墾により千間堤完成(5年後決壊)
				・手賀沼干拓竣工
		1732	享保17	・享保の大飢饉
		1737	元文2	・藤ヶ谷に鮮魚街道石橋が作られる
		1738	元文3	・千間堤洪水により決壊
		1745	延享2	・手賀沼再工事竣工
				・利根川洪水のため千間堤再決壊
		1748	寛延元	・水戸公、小金原で鹿狩、帰途、弁天で参詣
		1783～87	天明3～7	・関東一帯大飢饉(天明の大飢饉)
		1787	天明7	・寛政の改革始まる
		1790	寛政2	・船戸・小青田等16ヵ村・水戸公の鷹場の免除を願い出る
		1795	寛政7	・小金原で將軍家齊鹿狩
		1849	嘉永2	・小金原で將軍家慶鹿狩
		1853	嘉永6	・黒船渡来で世間騒がしくなり水戸街道の往来がはげしくなる（助郷増加）
				・非常時（黒船渡来）のため、村々から船戸、藤心詰足輕勤番差し出す
				・品川沖へ御台場建築のため根戸村御林から木材を江戸へ送る
		1855	安政2	・下総布川の儒医、赤松宗旦「利根川図誌」を著す
		1867	慶応3	・大政奉還

時代区分		西暦	年号	主なできごと
近代	明治	1868	明治元	・旧領主本多紀伊守、駿河から安房国長尾藩（現南房総市白浜）へ移封
		1869	明治2	・葛飾県の支配となる
		1871	明治4	・小金、佐倉牧開墾会社設立、小金・佐倉牧廃止 ・ 廃藩置県
		1873	明治6	・葛飾県を廃止、印旛県となる
		1873	明治6	・下総開墾会社を解散
		1873	明治6	・豊四季村、十余二村誕生
		1879	明治12	・千葉県となる ・第1回県会議員選挙、成島巍一郎（布施）、木村作左衛門（名戸ヶ谷）当選する
		1888	明治21	・藤ヶ谷に鮮魚街道常夜灯造立
		1888	明治21	・利根運河の工事始まる
		1889	明治22	・ 大日本帝国憲法発布 ・ 市町村制施行
		1890	明治23	・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村誕生
		1894	明治27	・利根運河完成
		1896	明治29	・ 日清戦争始まる
		1897	明治30	・常磐線（当時日本鉄道株式会社土浦線）、田端～土浦間開通、柏駅開設
		1901	明治34	・成田線開通（成田～佐倉間開業）
		1904	明治37	・成田鉄道（現成田線）我孫子～安食間開通（成田直通は翌年）
		1911	明治44	・ 日露戦争始まる ・県営軽便鉄道 柏～野田間開通（現東武アーバンパークライン）
	大正	1914	大正3	・ 第1次世界大戦始まる
		1920	大正9	・陸前浜街道は国道六号となる ・第1回国勢調査実施 柏市域人口24,908人
		1923	大正12	・ 関東大震災 ・北総鉄道株式会社、柏～船橋間開通（現東武アーバンパークライン）
		1926	大正15	・東葛飾中学校（現東葛飾高校）開校 ・詩人「八木重吉」が東葛飾中学校に赴任 ・柏郵便局に電報、電話事務取扱 ・千代田村、柏町と改称（9月15日）
	昭和	1928	昭和3	・豊四季に柏競馬場できる
		1938	昭和13	・十余二に陸軍柏飛行場建設始まる
		1939	昭和14	・ 第2次世界大戦始まる
		1941	昭和16	・ 太平洋戦争始まる
		1943	昭和18	・この頃柏町に軍需工場ができる
現代	昭和	1945	昭和20	・ 広島、長崎に原爆投下、日本無条件降伏
		1947	昭和22	・利根遊水地の築堤始まる
		1949	昭和24	・常磐線松戸～取手間電化
		1952	昭和27	・国道6号整備着工（50年完成）
		1953	昭和28	・南柏駅開設
		1954	昭和29	・柏町、田中村、小金町、土村が合併「東葛市」となる ・小金町の大部分が松戸へ合併
		1955	昭和30	・東葛市に富勢村の大部分を編入し柏市誕生（11月15日） ・手賀村、風早村が合併し沼南村となる ・国勢調査 柏市の人口45,020人、沼南村人口10,911人、合計市域人口55,931人
		1957	昭和32	・米軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）開設
		1964	昭和39	・国道6号（小金～青山間）で全線開通（12月） ・ 第18回オリンピック大会東京で開催
		1970	昭和45	・沼南村が沼南町となる ・柏市人口10万人突破（11月） ・国勢調査 柏市の人口109,237人、沼南町人口15,262人、合計市域人口124,499人
		1973	昭和48	・ 日本万国博大阪で開催
		1975	昭和50	・国道16号（野田～千葉間）全線開通（4月） ・柏市人口15万人突破 ・沼南町人口2万人突破 ・柏駅東口再開発事業完成 東口ダブルデッキができる（10月） ・ 海洋博、沖縄で開催 ・柏市の人口20万人を突破（5月）

時代区分		西暦	年号	主なできごと
現代	昭和			・国勢調査 柏市人口203,065人、沼南町人口22,150人、合計柏市域人口225,215人
		1979	昭和54	・米軍柏通信所（柏の葉）全面返還（8月）
				・沼南町人口3万人突破
		1982	昭和57	・柏市の人口25万人を突破
		1985	昭和60	・科学万博，筑波学園都市で開催
				・常磐高速道路一部開通（柏～三郷）
	平成			・国勢調査 柏市人口273,128人、沼南町人口38,027人、合計柏市域人口311,155人
		1987	昭和62	・運輸政策審議会において常磐新線の整備を答申（7月）
		1988	昭和63	・柏市立十余二小学校開校
				・沼南町人口4万人突破
		1989	平成元	・柏市の人口30万人を突破（5月）
				・国勢調査 柏市人口317,750人、沼南町人口45,130人、合計柏市域人口362,880人
		1991	平成3	・税関研修所移転
				・柏の葉公園一部開園
				・千葉大学園芸学部附属農場設立
				・1都3県は宅地・鉄道一体化法に基づく基本計画を策定し、運輸・建設・自治大臣が承認
		1992	平成4	・国立がんセンター東病院開院
		1994	平成6	・常磐新線起工式（秋葉原～新浅草間）（10月）
		1996	平成8	・緑園都市構想策定（3月）
				・さわやかちば県民プラザ開館
		1999	平成11	・科学警察研究所移転
				・東京大学の物性研究所・宇宙線研究所が柏の葉キャンパスへ移転
		2001	平成13	・常磐新線新名称を「つくばエクスプレス」に決定（2月）
				・柏ゴルフ倶楽部閉鎖（9月）
		2003	平成15	・千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター設立
		2004	平成16	・柏市制50周年記念式典を挙行
				・つくばエクスプレス開業「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」誕生（8月）
				・国勢調査 柏市人口380,963人
		2007	平成17	・県立柏の葉高校開校
		2008	平成20	・中核市となる(4/1)
				・柏の葉国際キャンパスタウン構想策定（3月）
		2011	平成23	・柏の葉キャンパスを中心とし、内閣府より「総合特区」及び「環境未来都市」の対象地域として指定（12月）
		2012	平成24	・柏の葉小学校開校（4月）
		2014	平成26	・柏市制60周年
		2018	平成30	・柏市立柏の葉中学校開校（4月）

（引用文献）

柏市教育委員会. 2018. 郷土かしわ地理・歴史・公民編 平成30年度版. P99-114

柏市市史編さん委員会. 2007. 歴史ガイドかしわ. P238-241. 柏市教育委員会

柏市教育委員会. 2014. 柏市郷土資料室揭示 柏市略年表

（公財）千葉県教育振興財団. 2017. 常磐道の遺跡展図録

柏市議会事務局. 2018. 市政概要 平成30年版. P275-277

（参考文献）

柏市史編さん委員会. 1980. 柏市史年表. 柏市役所

柏市役所（最終更新日2018.1.11）柏市の歴史 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020300/p000077.html> 2018.8.27参照

柏市役所（最終更新日2017.3.8）旧沼南町の概要 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020100/p000138.html> 2018.8.27参照

柏市役所（最終更新日2018.7.2）柏市統計書 平成29年版 柏市の沿革 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p008433.html> 2018.8.27参照

柏市役所（最終更新日2018.5.23）柏市都市計画マスタープラン平成30年4月 p7 都市の変遷 www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm 2018.8.27参照

「私たちの柏の歴史～牧から街へ～」制作プロジェクトチームメンバー

統括・代表	野田勝二（千葉大学環境健康フィールド科学センター） 大鷹秀生 笠羽英男 河合都志子 今野尚子 齋藤優子 下重野乃香 常盤 猛 中山千花 浜口勝美 校條邦夫 山口政子
制作協力	高野博夫（柏市生涯学習部文化課）
表紙・裏表紙デザイン	大野将司
印刷協力	柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）

発行者：千葉大学柏の葉カレッジ・リンクプログラム
野田勝二
発行日：2021年6月30日
千葉大学環境健康フィールド科学センター
〒277-0882
千葉県柏市柏の葉 6-2-1



昭和初期までの柏の葉地域 (UDCK)

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム